

## 1 公立にがんばってほしいから

よりよい学校づくりのための塾からの提案①

花まる学習会代表 **高濱正伸**



著者紹介 1993年、小学校低学年向けの「作文」「読書」「思考力」「野外体験」を重視した学習教室「花まる学習会」を設立。「小3までに育てたい算数脳」ほか、著書多数。近年、公立学校への支援にも力を入れている。

### ◆長期ひきこもりの問題

連載が始まるにあたって、自己紹介をし、問題意識を明確にしておきたい。もう二〇年以上前になるが、私は、二〇代の頃から塾・予備校などで大学受験生を指導する中で、「教育の失敗のなれの果て」を見て来た。その一番の問題は、「生きる力・意欲」の欠如した若者が、あまりにたくさんいることであった。言われたことは、とりあえずやる。だが、エネルギーがない。なぜと思考する力がない。人生を楽しむぞという意気が感じられない。

大学へ通すということだけで言えば、テクニックを教え、暗記するくらいに反復させることでも、ある程度は合格させることはできる。少々志望を下げさせれば、さらに楽に通せる。

だが問題は、それで合格したところで、

きつとこの子は、社会人としては通用しないだろうなと思わざるをえない人間として、すっかり育ちあがってしまったことだ。

そして、二〇数年を経て、その危惧は、ものすごい数の「長期ひきこもり」の問題となつて、現実となつてしまつていいる。今や、中学時代の同級生を思い起こせば、一人や二人は、「あの働いていない〇〇君」と言う人物を、全員が具体的に思い起こすことができる時代になつてしまつた。中には、従兄弟や兄弟にいたる人もいたろう。

ここでは、なぜそうなつてしまつたか、万人を納得させる解答を、提示しようとはしていない。ただ、私なりに試行錯誤して、考えて、いくつかの答えを得た。

### ◆社会の現実を伝えなかつた

それは、「話せば分かる」「体罰は（除菌するよう）絶対にあつてはならない」

「いじめをなくそう」式の、きれいごと教育をしてきたことが一つ。

本当は、「大学を卒業して世の中に出たら、理不尽だらけなのだ」と教えるべきだったのだ。「合わない（引きこもる人たちのキーワード）」人がたくさんいるのが世の中なのだ」としっかりと教えるべきだったのだ。力づくで押し付けてこようとする上司がいたり、感覚の合わない同僚がいたり、クレーマーの顧客がいたり、中傷してくる人や騙そうとしてくる人がいるのが、ごく当たり前の世の中で、しかしだからこそ、刻苦勉強し実力をつけ、高い志をもつて、前向きに乗り越えて生きなければいけない、と教えるべきだったのだ。

学生は、「お客様」である。税金も含め、学校にお金を払っている側である。欠席すれば、電話で心配した連絡も来るだろう。

だが、社会人になつたとたんにお金をいただく側になる。学生様の気分分いたものが、全く通用しない厳しさに直面する。ここで、多くの若者がはじきだされてしまう。

というより、自ら出てしまう。「こんなマニュアルの厳しい会社は『合わない』」と言って出たものの、楽な仕事・甘いポジションなどあるわけがない。結果、アルバイトを繰り返してはやめる。それでもまだまだして、年若い親のスネをかじって引きこもつて、全く仕事をしていない人もいる。可愛そうなのは、本人である。

### ◆思考力の低下

学習の指導が「台形の面積の公式」のような「知識」に偏り、「思考」についての豊かな指導が成されてこなかつたことが一つ。

計算で「早く正しく答えを出す」ことをほめられ、それを良しとする学習観を作り上げた子は、気の毒である。まず、文章題の壁に突き当たる。「計算はできるんだけど、文章題が苦手」などと親子で言う人たちもいる。だが、大学入試から中学入試までを俯瞰したときに、「文章題が苦手」というのは、「勉強そのものがすべてダメ」ということとほぼイコールである。なぜな

ら高学年以降の問題は、どんな科目にしろ、文章題が大半であるからだ。

文章題であることが問題でなくなつたとしても、その先には、「思考力の壁」が存在する。詳細は拙著『小3までに育てたい算数脳』（健康ジャーナル社）や、『小4からの算数脳トレーニング』（Z会）を読んでいたのがよいのだが、要するに、公式を正しく覚えてしっかりと使えればよいなどということとは、全く違う次元で、入試の「思考力の壁」は設定されていて、それは指導要領にはないものである。したがつてその壁を突破するための、「思考力指導」は、なされていない。

考える力そのものに注目して伸ばす指導はできないものだろうか考えた。

### ◆私塾設立へ

そして一九九三年、小学校の低学年時代を中心に、計算の反復練習などは踏まえた上で、①より思考力に指導の重点を置き、②作文や野外体験など生きる力に直結する活動に力を入れ、③「親ごと変える」という塾、花まる学習会を設立した。

一六年の活動の結果、思考力指導については、「なぜべー」（草思社）「チャレべー」

（実務教育出版）「立体王」（学研）といった新視点の教材を出版し、そのいくつかはロングセラーになった。また、「アルゴクラブ」という思考力指導に特化した低学年授業を生み出したが、これは、全国の塾を席捲するという表現がピッタリの広がりを見せていて、既存の大手塾が競つて導入するまでになった。

野外体験も、年間二〇〇〇人を超す子どもたちを引率し、滝つぼに飛び込ませたり、がけを上り下りしたりと、多くの体験を提供している。

親の指導は、例えば「母親だからできること」という演題での講演で、小学校・幼稚園・公民館などから、一年に数十回も呼ばれるまでになった。

なぜ私が、公立に肩入れしているかという点、私自身がすべて公立で小学校から大学までを過ごした恩義があることが一つ。

そして公立がしつかりしていたからこそ日本は強かつたという、思いがあるからである。そういう私から見た、公立学校の問題点、こうしたらもっとよくなるのといった改善提案を、これから書いていきたい。